

土佐のわらべ

第386号 《第408回（2013. 9. 12）子どもの本の読書会記録》参加者4名・文書参加6名

『ルドルフとイッパイアッテナ』 齊藤洋 著 講談社

岐阜で女の子に飼われていた黒ねこのルドルフ。魚をくわえて逃げているうちに忍びこんだトラックが動き出して、たどり着いたのはなんと、東京だった――

東京で出会ったトラねこイッパイアッテナに、いろいろと助けてもらいながら、子ねこだったルドルフがだんだんと成長していく物語の第一巻です。

著者齊藤洋氏は本作がデビュー作。ドイツ文学の大学講師でもある作者は、自身が研究していたホフマンの作品『牡猫ムルの人生観』を参考にして本作を書いたそうです。あとがきによれば、ねこが書いたものを「きちんと清書してから、講談社児童文学新人賞に応募してみました」、とのこと。結果は見事大賞を受賞。続く『ルドルフともだちひとりだち』（1988年）でも野間児童文芸新人賞を受賞しました。

以降、ルドルフとイッパイアッテナシリーズの続刊やペンギンたんけんたいシリーズ、白狐魔記シリーズなど、数々の著作を生み出しています。

『ルドルフとイッパイアッテナ』は、物語自体は、ごく日常的な毎日のことを書いたもの。けれど、読み書きをするネコが主人公、という要素が加わることによって一気に非現実にはきこまれます。

読書会で出された感想をご紹介します。

・絵が印象的。表紙は派手な色づかいでぱっと眼をひくので、子どもたちも手に取りやすいのでは。

・『ルドルフとイッパイアッテナ』と言えば杉浦範茂さんのこの絵。イメージが固まってしまい、読者が入る余地がないのが残念。

・キャラもストーリーも面白い 素直に楽しく読める本なのだけど、それだけではない。字が読め 学ぶということが続いているイッパイアッテナを見て学ぶことの大切を知ることができる。子どもたちは学ぶことが生きていくうえで役立つこと、大人には生涯学ぶ姿勢を。そしてルドルフからは強く願ひ思い続けることの大切さを。また、仲間を思い合う心にも。

・同じ説教でも、優等生や大人に押しつけがましく言われると反発してしまうけれど、ネコという身近な存在、しかもイッパイアッテナに言われると素直にきけてしまう。

・頼れる先輩がいるというのは、なんとも心強い。字を覚える・・・教育の大切さ。人間との関わり。悪役との対決。子どもが成長していく過程が、全て入っているんですね。

・“ルドルフ”もそうだけれど私が読んだ齊藤さんの本はどれも読みやすく、面白かったのですが、「面白かった」という記憶以上の記憶があまりないのです。

・さっと読め、楽しいお話でしたが、深みがなく物足りなく思う部分も。

読む人によって感想が違う、というのは当たり前のことですが、こんなにもいろいろな受け取り方があるのかと、みなさんの感想を聞いていて驚きました。子どもたちもまた、自分のいる環境によって、いろいろな事を感じ取ってくれるのではないかと思います。

本作を書くこととなった経緯や「童話作家」の仕事の裏側などがユーモラスに書かれた、『童話作家はいかが』（齊藤洋著）と併せて読むとより面白いかもしれません。